写真：三橋仁明／N-RAK PHOTO AGENCY

ここから伝説がはじまる！

電動化を指す「xEV」の呼称が定着し、内燃機関を持たない100%電気自動車を「BEV」と定義されることがニューノーマルになった。

かつて14世紀に地球上で2500万人の命を奪ったというペストの大流行。そのパンデミックの後にルネッサンス（芸術・思想の解放）が生まれたように、日本発のBEVは、これからのクルマのあり方を変えてくれるはずだ。

2022年はBEV元年！

感動を呼ぶ電動車が続々

100%電気自動車

BEVを核とし多元的に地球と共存するのが日本車

環境破壊に直結する、温室効果ガスの削減は全人類が取り組むべき課題であることは間違いのないところ。それは納得できるが「地球上の自動車すべてを電動車に置き換える」というのはどう考えても暴論だ。そんなヨーロッパが官民合同で進める流れに、わが日本も飲み込まれつつある。本来、バイオ燃料や水素など多様なソリューションによる対応が許されてしかるべきなのに、特に日本メーカーに関しての「電気自動車に出遅れた」の風評は、ほとんど言いがかりに近い。

そこでモリゾウこと豊田章夫がまたも気を吐いた。モーターショーでもここまで開陳したことのない、開発中のBEV（100%電気自動車）を2021年12月、何と16モデルも一気に開陳したのだ。併せて4兆円の投資額と30年までに年350万台販売という数値目標も発表した。様子見でBEVを小出しにしてきた他メーカーはトヨタの開発力にぶっ飛びネガティブな世論は逆転した。時を同じくして日産も、2兆円の投資を軸とした2030年までの長期計画を発表。もやっとした思いを抱いていた日本のユーザーをすっきり晴れやかにさせてくれた。

まとめ：畑澤清志

2030年には欧州、北米、中国でラインアップすべてをBEV化するレクサス（グローバルでは2035年を目標）。

16モデルの中にはBEVスポーツも含まれていた。誇らしげにGRバッジが輝くこのモデルは、グループ企業であるマツダ・ロードスターの未来像とも無縁ではない。

BEVでもスポーツ心を忘れない

2030年までにBEV15車種の投入を宣言したのが日産。うちクロスオーバーSUVが、超低重心スポーツなどをプレビュー。